

契丹文字談義

—大字「天朝萬順」錢をめぐる—

吉池孝一

東アジアの解読が必要な“文字と言語”に関心を持つ学生と教員の対話です。登場人物の設定は次のとおり。

佐藤久美：学生。歴史一般に関心がある。

山村健一：学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。

安井教授：漢文の教員。いろいろな文字に関心がある。学生とともに契丹文字の勉強を始めた。

・・・・・卓上に古銭がある・・・・・

天朝萬順錢

安井教授：10世紀以降しばらくの間、東アジアは古代の文字を勉強する者にとっておもしろい時代です。次々と新しい文字が作られました。10世紀に遼（916～1125年）で契丹文字、11世紀に西夏（1038～1227年）で西夏文字、12世紀には金（1115～1234年）で女真文字、13世紀に元（1271～1368年）でパスパ文字が作られました。

佐藤久美：今回は契丹文字を検討するのですね。たしか契丹文字には二種類ありました。

安井教授：契丹大字と契丹小字です。ここに銅貨があります。契丹文字が铸込まれています。この貨幣、A面の銘文は契丹大字で、B面は無地です。



A (契丹大字)



B

佐藤久美：漢字に似てますが、画数が少ない印象を受けます。何と書いてあるのでしょうか。

安井教授：左まわりに、①天、②朝、③萬、④順で、「天朝萬順」とする読みが

あります<sup>1</sup>。

山村健一：「天朝萬順」は、漢文として見れば“天意による王朝（遼朝）は万物が和やかで順調である”というような意味だと思のですが、何を根拠に契丹大字をこのように読んだのでしょうか。

### 劉鳳翥氏による銘文の解読

安井教授：根拠は、契丹大字と、漢字および女真文字との類似です。史書によると、契丹大字は漢字の筆画を増減して作り<sup>2</sup>、女真文字は漢字と契丹の制度（制度とは契丹文字で言葉を表記する仕方）に拠って作ったとあります<sup>3</sup>。劉鳳翥（1988）は<sup>4</sup>、契丹大字の源は漢字であり、女真文字の源の一つは契丹大字であるから、契丹大字の解釈は漢字と女真文字の両者を比較して行う必要があるとして、漢字の字形と女真文字の字形との類似を利用して契丹大字を解読します。例えば、契丹大字の①と女真文字の禾 abxa（天）の字形は似ています。そこで、①に拠り女真文字の禾 abxa（天）が作られたと理解し、①の意味を“天”と想定します。なお、この文字が漢字の「天」に似ていることは一目で分かりますね。

山村健一：契丹大字①の意味を知る手順として漢字や女真文字との類似を利用するのは理解できます。大字の読み方は分からないのですか。

安井教授：分かりません。abxa というのは女真語ですので参考になりません。日本語で「月」を漢字音で「ゲツ」と音読したり、和語で「つき」と訓読したりするように、契丹人は、漢字「天」に筆画を加えて作ったこの文字①を、漢字音「天 t<sup>h</sup>ien」<sup>5</sup>に近い音で音読したか或いは契丹語で訓読したかいずれかでしょう。劉鳳翥（1988）で展開されている議論の要旨を図 1 としてまとめてみました。なお劉氏は、女真文字の音と意味について金啓琮(1984)<sup>6</sup>を利用します。

佐藤久美：図 1 の注記の部分に「金に朝という音注が付される」とありますが、音注が付さ

1 劉鳳翥（1988）「契丹大字銀錢和遼錢上限問題」『内蒙古金融』1988、9-33—9-41 頁参照。なおこの種の貨幣には二種類ある。この貨幣のように左まわりに天朝萬順と文字を配すものと、上下左右に天朝萬順と文字を配すものである。

2 『新五代史』卷七十二「四夷附録第一」に「阿保機に至り、ようやく近傍の諸小国を併呑し漢人を多く用いた。漢人は隸書の過半を増減し、文字を数千作り伝授し、これによって刻木による契約に代えた。」とある。「隸書」とは漢字の俗字のこととされる。

3 『金史』卷七十三「完顔希尹」に「太祖は希尹に命じて自国の文字を作り、制度を整えさせた。希尹は漢人の楷書に倣い、契丹の制度により、自国語に合わせて女直字（女真文字）を作った。」とある。

4 注 1 参照。

5 漢字音は藤堂明保編(1978)『学研漢和大字典』東京：学習研究社の元代（中原音韻）による。学問分野にもよるがカールグレンやバックスターなどを上げるまでもなくこの字典で十分であろう。

6 金啓琮(1984)『女真文辞典』北京：文物出版社。

れているとはどういうことでしょうか。

契丹大字	女真文字			注記
	字形	音注	意味	
① 	禾	阿卜哈以 abxa-i	天	漢字の天に類似する。
② 	缶	朝 fiao		缶に朝という音注が付される。
③ 	方	土滿 tumən	萬	当時の漢字簡体字の万に類似する。
④ 	𠂔	申 jin		𠂔に申という音注が付される。 申 (jin) は順 (juən) に音が近い。

図1.契丹大字銘文解読のまとめ

安井教授：音注についてはこういうことです。金啓孫(1984)は、解読の成果をまとめた女真語の辞典です。主な資料は『女真館訳語』と各種の碑文です。『女真館訳語』は明代の永楽5年(1407)に設立された四夷館の一つ女真館で作られた書です。漢語と女真語の対訳語彙集「雑字」と例文集「来文」とから成ります。「雑字」の全体の構成は、天文門、地理門、時令門、花木門など内容別になっています。ここに天文門の最初をだしました。1行目に女真文字で書かれた女真語の単語や連語があり、2行目に女真語の意味を大書した漢語があり、3行目に女真文字・女真語の発音を漢字で音写した注記があります。これでワンセットです。現存するものは917セットとなります。「阿卜哈以」(abxa 天-iの)が女真語の発音を示した“音注”です。このような音注に漢字の「朝」や「申」が使われています。

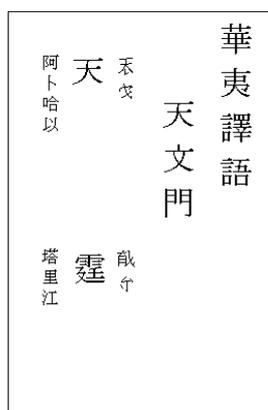


図2.「雑字」初頭の翻字

山村健一：図1によると、天と萬については、女真文字が契丹大字の字形と意味を受け継いだとみて問題はないようです。朝については疑問です。朝について成り立つ場合は、漢語「朝」の意味と発音を借用語として契丹語に取り入れ、それを契丹大字

で表記した場合です。漢字音注に朝を使っているだけでは借用語であるとは言いきれません。それは順についても同様です。順については近似音の音注「申」を介しての議論ですから一層理解は困難です。

安井教授：音注の朝と申（順に音が類似）を介して女真文字を契丹大字に結び付けることの危うさは即實(1996)<sup>7</sup>も指摘しています。

佐藤久美：漢語の「朝」と「順」を借用語として取り入れたことを示す女真文字・女真語の資料はないのでしょうか。

安井教授：あります。

### 順に相当する契丹大字と女真文字

安井教授：『女真館訳語』の例文集「来文」に興味深い例があります。「来文」は漢文とその漢文を逐語訳した女真文字・女真語からできていて29通ほどあります。これは第1通の文です。

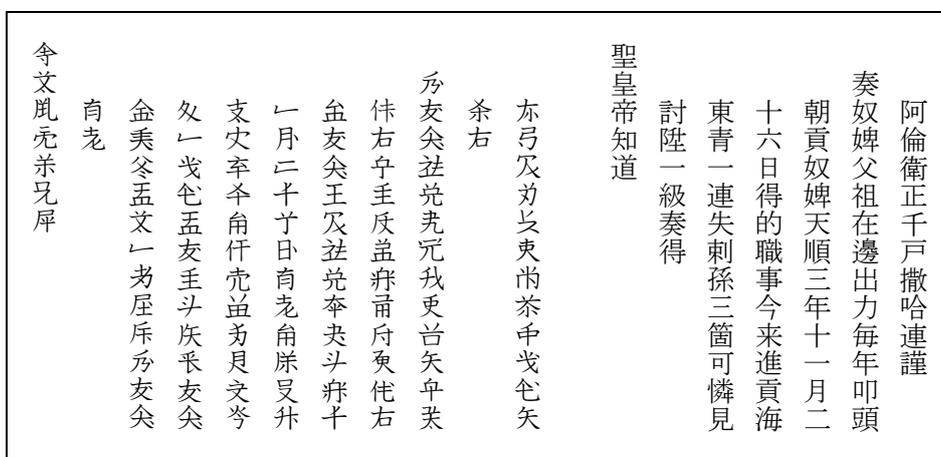


図3.「来文」第1通の翻字

佐藤久美：問題の「順」が、漢文の年号として3行目に「天順」として出ています。対応する女真語はどのようなものなのでしょうか。

安井教授：5行目の上から8・9字に奉夬とあります。これが漢文の「天順」に相当します。

「雑字」によると奉の音注は「天」 tien です。夬は「雑字」にはありませんが、金啓琮(1984)は、古代帝王名「舜」の表記に使われることから音を fun とします。そうすると奉夬の音は tien-fun で、漢語「天順」の音訳ということになります。

佐藤久美：天順は明代の年号です。その「順」を表記するために金代に作られた女真文字夬 (fun) を利用したということまでは分かりますが、それから契丹大字④<sup>8</sup>までの様に繋がるのでしょうか。

<sup>7</sup> 即實(1996)「“萬鈔”誰見 “丹寶”怎解」『謎林問徑 —契丹小字解讀新程』瀋陽：遼寧民族出版社、589-599頁。

山村健一：「順」も「舜」同音で漢語音は *ʃuən* です。少なくとも女真文字においては、漢字の意味から離れて、漢語音 *ʃuən* を表記する表音文字となっています。日本語の仮名のように音節を表記する働きを持った文字と考えて良いのでしょうか。

佐藤久美：契丹大字④も同じ働きをもった文字であったということですね。

山村健一：そういった可能性はあるのですが、根拠がなければ何も言えません。契丹大字④の段階では漢語「順」の意味と音を表す文字であったが、女真文字に転じて取り入れられたときに、音だけを表すようになったということかもしれません。

佐藤久美：今後の課題ですね。安井先生、漢語の「朝」を借用語として取り入れたことを示す女真文字・女真語の資料の方はいかがでしょう。

### 朝に相当する契丹大字と女真文字

安井教授：『女真館訳語』「来文」の no.27 に、漢文「朝廷」に対応して「金友矣件奴」とあります。この語は金 *ʃao* (朝)、友 *la* (動詞を作る接辞)、矣 *mai* (動詞語尾) で「謁見する～」となります。件 *ti* と奴 *in* は、廷の漢字音 *ʈiəŋ* の音訳です。

山村健一：そうすると「金友矣件奴」は「謁見する場所」で「朝廷」ということになりますね。契丹人は、漢語の「朝」(謁見)の意味と音を借用し契丹大字②で表記した。それに拠って女真文字「金」が作られ漢語からの借用語として使用したと説明することができますね。問題は契丹大字をどの様に発音したかということです。

### 契丹大字銘文の音

佐藤久美：①②③④の対応する女真文字をみると「禾金方夾」で、女真文字の1字目と3字目が女真語による訓読で、2字目と4字目は漢語借用語として音読されています。日本語の手本(てほん)や消印(けしいん)のように訓読と音読が混じった“湯桶読み”がなされた可能性はないですか。

山村健一：可能性まで否定はしませんが、2字目と4字目が女真語で音読されたことを考慮すると、契丹大字②と④も音読されたのでしょうか。そして契丹大字①と③も同様に音読されたのが自然ではないでしょうか。

佐藤久美：全て音読されたという根拠がほしいところです。

山村健一：根拠にはなりません、「天朝萬順」の漢字音は *ʈien-ʃʰieu wan-ʃuən* です。1字目と2字目の声母を有気音で揃えているように見え、1字目と3字目と4字目は韻尾を *-n* で揃えているように見えます。音読であるならば、発音し易く、耳で聞いて心地良いように僕は感じます。

安井教授：山村君が言うように、「禾金方夾」の2字目と4字目が女真語で音読されたことを考慮して、反証が出るまでは、4つ共に音読されたとしておきましょう。

## 契丹大字音の追加

安井教授：劉鳳翥編著(2014)の「部分契丹大字擬音」<sup>8</sup>に契丹大字の音が 242 種収められています。そのうち 163 番に契丹大字①があり then とします。これは「天」の漢字音です。

山村健一：契丹大字②③④は収められていませんね。借用漢字音として②<sup>gh</sup>ieu、③wan、④juən を追加しませんか。もっともこの音は元代の『中原音韻』の音です。遼の契丹文の中でどの様に読まれたかについては課題です。

安井教授：そうすると、契丹大字錢の銘文①②③④は劉鳳翥氏の説に従って「天朝萬順」と読む。対応する女真文字を「禾金方夬」とする。契丹大字①②③④は漢字音で音読された。②③④の音については劉鳳翥編著(2014)の「部分契丹大字擬音」に追加するということですね。今日の勉強会はこちらまでにしましょう。

\* 2020 年 4 月 4 日に文章の表現を少々改めた。

---

<sup>8</sup> 『契丹文字研究類編 第一冊～第四冊』北京：中華書局の第二冊所収、444-448 頁。